

山崎一穎先生のご退任にあたって

我が心の山崎先生

文学部人文学科教授・学長 嶋田英誠

山崎教授が定年を迎えられる。私が跡見に来て、山崎先生に初めてお会いしてから、三十年になんたとする月日が積み重なり、過ぎていったわけだ。この間、敬愛する先輩として指導を仰ぐことが永かったが、志を共有する仲間としてともに旗を掲げたこともあり、時にはお互いに反撥し、喧嘩をしたこともあった。

山崎先生の思い出を語ろうとする時、私のほうからすれば、どうしても初対面の場を除くことはできない。昭和五十四年七月一日、私は跡見学園女子大学の学長室を訪ねた。場所は今と変わらず新座キャンパス一号館学長室、私の専任教員としての初出勤日であった。執務机の向こうに立つ山崎学長先生から恭しく辞令を受

け取った後、私は信じられない言葉が発せられるのを聞いた。適切な連帯保証人を立て、人物保証書を持って来い、というのである。あまつさえ、これに書いて来い、と手渡された罫紙は、あたかも戦前の女学校が用いたであろうような、それであった。ああ、そうだったな、ここは女子大なのだ。

私は、その前日まで学生であったわけではない。四年とながしか、国家公務員として教育と研究に携わってきた、そして求められてここに来た。プライドはあるが——若かったし——、なにしろ前日にそちらのほうは退職辞令を受け取ってしまったのだから、いままさら跡見はいやだとも言えないし——もう家族持ちだったので——、やけくそに聞いてみた、何のために保証人が必要なのか、金と女か、と。そうしたら、この先生、何に動ずることもなく一言おっしゃった。そうだ、と。これはもう、こちらの負けです。大した先生だ、心にもあるまいこと、そらつとほけた御尊

顔を拝すれば分るのに。時に、先生は四十一歳、私は三十四歳であつた。

縁あつて、翌年の秋から山崎執行部の末席を汚すことになった。教務や入試、図書館など、六年間お手伝いした、というよりは、徒弟修業をさせていただいた。この間に頂いたご指導に対しては、言葉では感謝しつくせないものがある。そして、山崎学長の施政の熱情が、あの連帯保証人問題に象徴されるような跡見の古い体質の近代化にあることを確信し、私のみならず当時の若い教員の多くが、山崎学長の旗のもとに集つた。

そのころ私たちが力を注いだ具体的な課題は、学生たちの勉強意欲に応じ得る柔軟で質の高いカリキュラムの構築と、入試の偏差値の引き上げであつた。私自身、北は旭川から南は鹿児島まで大学説明会で駆け回つたが、しかし、跡見のブースは概ねどの会場でも、まあ、閑古鳥が鳴くか鳴かないか、その程度の入りでしかなかつた。跡見は伝統のある名門大学、誰でも知っている有名な大学だと、先輩教授たちからことあるごとに聞かされてきたのにも関わらず。

昭和六十一年、二年頃、私は執行部から離れて入試委員長を務めていた。委員会は、栄光の伝統という跡見伝説の実態を知るため

に、在学生に対してその志望動機をたずねる悉皆調査を行つた。その結果は、十分に衝撃的なものであつた。第一の質問は、あなたは跡見という学校の名前をいつ知つたか、とした。小学生以前から知つていた、中学生時代に知つた、この両項目は合せて十パーセントほどであつた。それに対して、高校三年生の時に知つたという学生が、半数を超えた。それでは跡見の名をどのようにして知つたか、それが第二問。家族や親戚から聞いて知つていた人は、十パーセントに満たなかつた。三分の二ほどの学生は、高校や塾の先生から教えられたか、受験雑誌で初めて見たのであつた。これでは、跡見の栄光の伝統は高校生に対して有効にはたらない、いらない、それどころか、大学として選ばれる時期が遅すぎる、おそらく大半の学生は滑り止め受験、不本意入学である可能性が高い、と推測された。

この結果に基づいて、本学ではたぶん初めての、本格的な広報計画が策定された。一九八九年度入試に向けて——当時昭和天皇の御容態に危惧があり、年号を用いなかつた——、初めて広報会社——リクルートだったのじゃなかつたか——に戦略の立案を依頼し、冊子の大学案内と組み合わせ、プロモーションビデオを作成することにした。『大学案内』自体も、従来のB6サイズか



『89ATOMI』跡見学園女子大学案内より



夢の贈りもの

from

卒業式が経って、学生連を校門から送り出すとき、彼女達の美しく成長した姿にいつも感動を覚えます。

私は、はじめて自分を出したいのだから、
自分を語るのことが出来る女性を
美しいと思います。

勤労の四年間の学生生活で
そのような女性に育って欲しいと
心から願っています。

私は、いつも学生連にこう語ります。

卒業後十年たった同窓会で、
子供や夫のことばかりを話題にする女性になって
欲しくない。

その十年間、自分がどう生きて来たのかを語るの
女性になって欲しいと。

大学では、

自由な雰囲気の中で、
自らの意志で節度を保ちながら、
確かな自分を確立してゆく場です。

同時に、四年間という貴重な青春の時を費しながら、
自分がどう生きてゆくのかを見つける場です。

みなさんはどういう人生を送りたいのか？
ぜひ、歸郷して自分の夢を見つけて下さい。

学長 山崎 一穎

ら、当時流行りだしていた女性雑誌——アンノンです——にあわせてA4に変更し、編集にデザイナーを入れ、ビジュアルイメージを重視し、プロカメラマンを使い、被写体に適度にモデルを用いるなど、跡見にとっては何から何までの初めてづくし、斬新な計画だった。予算上も当時の金で一千万円以上はかかることで、跡見理事長の英断には感謝した。

この『'89大学案内』は、内外にそれなりの波紋を広げた。外では、メディアが大学の新しい動きとして紹介してくれるなど、一定の反響を得た。そして内では、山崎学長に相当のご迷惑をおかけした。大学案内最終見開きページに、「夢のおくりもの Tom ATOMI」という学長メッセージにかぶせて、タキシード姿で花束を持つ山崎学長の写真を、大きく載せたからである。確かにそれは、伝統的な大学学長というイメージからは外れていた、それを狙ったのだから。そして、跡見の栄光の伝統を信奉する年配の理事の方々から、山崎氏はほとんどつるしあげられるに近かった、と聞いた。そして、跡見理事長がそれを擁護してくださった、とも。未だ、広報と宣伝との区別もついていない時代であった。

このような努力の結果か——勿論、外部状況も反映しているが——、昭和五十六年に四十八であった偏差値は、昭和六十年代半

ばには五十五、六に上昇した。

*

その時の大学案内が、いま久しぶりに目の前にある。庶務課長が、倉庫の中から探し出してくれたものだ。やはり、胸にある種の感慨が湧き上がってくるのを禁じえない。これは山崎学長が、そしてかれを応援した私たち若い世代が、跡見を愛した、その愛のあかしだ、と。たとえそれが、今の目から見てもどのように時代遅れに映っても……。

山崎先生、いま私の目の前に、一人の職員が立っています。彼女は、懐かしげにこの『'89大学案内』を見て、私にこう語ってくれました、「当時高校生だった私は、こんな学長のいる大学って、どんな大学だろう、って思ってた、この大学を受けました。そして何十年か経って、私は今この大学の職員として、ここにいます」
と。山崎先生、あなたを敬愛する一人の人間が、ここにもいます。